

## 『山月記』の修辭的分析

### ——「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」の修辭とその狙い——

柳 沢 浩 哉  
森 田 真 吾

#### 0. はじめに

本稿は『山月記』の修辭的な分析を目的とする。ただし、本稿は『山月記』全体ではなく、李徴の告白の中に現れる「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という言葉を具体的な分析対象とする。これは『山月記』の中でも、おそらく最も印象的な言葉であろうが、分析対象をこのように限定してしまうと、『山月記』の修辭的分析と題するにはあまりに分析対象が狭いと感じられるかもしれない。しかし、この言葉の修辭性を明らかにしていくと、巧妙に隠された告白の方略、さらに、その方略を実行するための綿密な仕掛けが浮かび上がってくる。この言葉が、告白の方略を実行する上で重要な役割を果たしているからである。告白における方略の存在は、言うまでもなく、李徴の告白全体の性格を判断する上で重要な意味を持ち、『山月記』の悲劇性あるいは主題の問題とつながっていく。われわれは、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」の修辭的分析を行った後、『山月記』の悲劇性について言及することになろう。さらに、第3節では、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」の放つ「語り尽くせない」魅力の原因を撞着語法の一般的性質から明らかにした。

本稿では、本研究の意義を明らかにするため、先行研究の整理を重視した。整理にあたっては、『山月記』の膨大な先行研究を整理するための視点を設定し、1990年を境に『山月記』研究の方法が大きく変化したことを明らかにした。本研究も、「李徴の告白」行為を分析対象とする、90年以降の研究方法の中に位置づくが、修辭的分析というアプローチを取ったことで、主題論に直結する言辭の分析という、従来の研究の踏み込んでいない領域において一つの見解を示すことができたと考えている。

なお、執筆は1節を森田が、2・3節を柳沢が担当した。いずれの節も両者の討議を経た上で完成したものであるが、最終的な責任はそれぞれの執筆担当者にある。

#### 1. 先行研究の検討—「告白」をめぐる解釈枠組みの変容—

##### 1.1. 視点の設定

本節では、本研究の立場（『山月記』研究における位置づけ）を明確にするために、従来おこなわれてきた『山月記』研究の流れを概観する。

中島敦『山月記』に対しては、これまで文学研究・教材研究の二領域にわたって数多くの業績が積み重ねられてきた。従来の『山月記』研究のまとめは、木村一信、鷺只雄、丹藤博文らの論

考に詳しいが<sup>9)</sup>、やはり、膨大に存在する『山月記』の先行研究をすべて網羅し、それらを系統立てて説明することは困難なことのようにである。『山月記』研究の流れを概観するためには、ある一つの明確な視点が必要とされなければならない。その視点から先行研究を検討し、それらを取捨選択しつつ、『山月記』研究史の流れをおさえるべきであろう。そこで、ここでは、『山月記』研究を概観するにあたっての視点を設定するために、従来の先行研究における「告白」の扱い方に注目する。

『山月記』のあらすじを極めて簡潔にまとめるなら、それは「李徴が虎になった自分の身の上を嘆く話」ということになる。あえて「嘆く話」と表現したが、言うまでもなく『山月記』は、構成上、李徴の旧友である袁俊に対する「告白」が物語の大半を占めている。そのため、『山月記』研究は、それを意識するしないにかかわらず、必然的に「李徴の告白」を分析せざるを得ない。これを念頭に置いて考えてみると、従来行われてきた『山月記』研究は、「李徴の告白」のどのような側面に焦点を当てて研究を行うかによって、ほぼ1990年を境としてその解釈枠組みが変容している点に気づく。

渥美孝子は『山月記』を李徴の告白小説とする従来の見方に対し、袁俊という存在を重視して李徴の語りが論じられるようになったのは九〇年代に入ってからのことであると指摘する。氏の指摘では、「告白小説」から「李徴の語り」へと研究の中心が移行したという説明に留まるが、さらに言うのであれば、これは『山月記』研究の分析対象が「告白そのもの(内容)」から「告白の為され方(行為)」へ移行したと説明することができる。すなわち、『山月記』研究の焦点が、「告白」の「内容」面から「行為」面へと移行したのである。これをふまえて、以下では、分析対象である「李徴の告白」に対する焦点化の相違という視点から、従来行われてきた『山月記』研究を概観する。

## 1.2. 「李徴の告白」内容に焦点を当てた研究

まず、李徴の「告白そのもの」を分析対象とした研究について述べる。これは、「告白」において語られる李徴の自己分析の内容を手がかりとしながら『山月記』の主題に迫ろうとするものである。戦後、『山月記』研究が本格的に進められるようになってから1990年代に至るまで、『山月記』研究は概ねこのアプローチによって進められていた。

『山月記』がその作品価値を認められ、本格的に作品研究が始まった時期において、まず、その主題を理解するために用いられた方法は、典拠である『人虎伝』との比較対照であった。『山月記』と『人虎伝』とは、登場人物名や主人公李徴が虎になるといったプロットなど、共通点の多いことは一目瞭然であり、『山月記』研究においては、両者の差異に注目することにより『山月記』の独自性あるいは主題を明らかにするといった方法がしばしば採られてきた。典拠との比較による注目点の一つが李徴の「人物設定」、特に「性情」(「臆病な自尊心と尊大な羞恥心」)の問題であり、これが初期の『山月記』研究においては盛んに議論されていた。中島が典拠を書き換えて設定した李徴の「臆病な自尊心と尊大な羞恥心」の問題を明らかにするために作品の文脈から離れ、『狼疾記』『かめれおん日記』といった中島の他の作品との関連について論じられるうち

に「中島敦のアキレス腱的要素」<sup>93</sup>といった作家論的な解釈や、「近代的自我の在りよう」<sup>94</sup>と結びついた解釈がなされるようになったのである。

この様な傾向に対して異論を唱えたのが佐々木充である。氏は「臆病な自尊心と尊大な羞恥心」を中心とした『山月記』の読みを「あまりにも『自我』—『近代的自我』の問題に密着した伝統的な読みとり方」<sup>95</sup>であると批判し、「臆病な自尊心、尊大な羞恥心」よりもむしろ李徴における「詩人的要素」を作品解釈において重視する。氏は自身の論考において次のように述べる。「彼（李徴）は『臆病な自尊心・尊大な羞恥心』の持ち主であったがゆえに虎になったのではない。まぎれもなく彼が『己れの詩業』を妻子の上に置いたが故のこととなる。（カッコは引用者）」<sup>96</sup>佐々木は、中島が李徴の人物設定に「詩人的要素」を付加した点を強調するために、李徴が虎になった原因を「己れの詩業」を妻子の上に置いた「非人間性」にあると主張する。その後、この主張に対して鷺只雄が批判を加える<sup>97</sup>ことにより、両者の間で「李徴が虎になった原因」についての論争が起こる。ここではその詳細について論じることを割愛するが、ここで指摘すべきは、このようなやりとりを通して、次第に「李徴が虎になった原因」を問うことが『山月記』研究の中心テーマとなった点である<sup>98</sup>。李徴の告白において、自分が虎になった原因について言及する部分は三ヶ所ある。「李徴が虎になった原因」を問題とする多くの先行研究は、これらのいずれかに注目しつつ自論を展開させている。そのような研究の蓄積の結果、今日一般的に語られる『山月記』の主題は、「〈人間存在の不条理〉〈自我意識の苦悩〉〈詩人としての悲劇〉」<sup>99</sup>とまとめられるに至った<sup>100</sup>。

ここまでは、李徴の「告白そのもの」を分析対象とした『山月記』研究の流れを概観し、その研究成果として「〈人間存在の不条理〉〈自我意識の苦悩〉〈詩人としての悲劇〉」という『山月記』の主題が設定されたことを確認した。しかし、このような主題の捉え方に問題がないわけではない。

先に示した三つの主題は、李徴の身の上で起こった事実あるいは過去の自身の有り様を回想する形でなされた「告白」の内容を検討することによって導き出されたものである。〈自我意識の苦悩〉〈詩人としての悲劇〉は、まだ人間であった頃の「過去の李徴」の悩み・悲劇であり、〈人間存在の不条理〉は、虎になった直後の「過去の李徴」の心境を検討することにより提出されたものである。すなわち、虎である李徴が、人間であった頃（あるいは虎になった直後）の自分を振り返って語る告白内容をそのまま「真実」とした上で、上記の主題は設定されている。こうした『山月記』研究のあり方に「根本的な疑義提出」<sup>101</sup>を行ったとされる蓼沼正美は次のように指摘する。

この作品の中で李徴は、自らについて『臆病な自尊心』と『尊大な羞恥心』との自家撞着に悩み、『飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を気にかけて』しまう、そんな自意識に捕われてしまった『悲劇』の詩人として自らを語っている。それだけにこの作品は、どうしても倫理的な解釈に陥りやすい可能性を、それ自体が孕んでいるとも言えるわけだが、実はそのためには、李徴の告白が自らの過去を対象化するにふさわしい、正確な

自己分析として語られていたかどうかということへの検討が必要なはずなのである。<sup>(12)</sup>

蓼沼は、李徴の告白における自己分析と作品冒頭の語り手によって示される李徴像との間の齟齬を手がかりとして、李徴の告白のされ方の妥当性を検討する必要性を訴える。すなわち李徴の告白内容そのものを分析対象の中心に据えるのではなく（そこから明らかになるのは過去の李徴の姿だけであって、しかもそれが正確に語られているとは限らない）、李徴の告白を「行為」として捉え、告白している「李徴の現在」を読むことに重点を置くのである。この蓼沼の研究をきっかけとして、近年の『山月記』研究は「李徴の告白」行為を分析対象とし、語っている李徴の現在を明らかにすることによって『山月記』の主題に迫ろうとする研究が主流になりつつある。

### 1.3. 「李徴の告白」行為に焦点を当てた研究

李徴によって語られる告白の内容そのものを分析対象とする研究アプローチは、まだ人間であった頃の李徴、すなわち「過去の李徴」の姿を明らかにすることに主眼が置かれていた。それに対して、1990年以降にさかんに採られることとなる「李徴の告白」の行為的側面に焦点を当てたアプローチは、語っている「現在の李徴」の姿を明らかにしようとする。この研究アプローチの大きな特徴の一つは、「李徴の告白」の行為的側面に焦点を当てることにより、それを李徴の「自己認識行為」と捉える点である。自らの身の上で起こった悲劇をどのように語っているのかという点に注目することにより、そのように語る李徴の現在の心境・状態を明らかにしようとするのである。そして、「告白」を自己認識の「結果」を語った行為とするか、あるいは自己認識の「過程」の行為とするかによって大きく立場が二分される。

「李徴の告白」を自己認識の「結果」を語った行為であるとする立場を採った研究としては、例えば蓼沼正美・山本欣司の論考が挙げられる。蓼沼は、李徴にとっての「詩」とは「産を破り心を狂わせて迄自分が生涯それに執着したもの」であったはずなのに（虎になってから考え抜いた結果そう認識したはずなのに）、「詩の伝録」を哀愴に頼むより先に自分の身に起きた「不条理」を訴えた点を疑問視する。そして、それを李徴の「自己劇化」（演出）のためであったと捉え、次のように指摘する。

人間が人間として生きられる最後の瞬間に、自己を対象化する言葉を語りながらも、なお劇的に自分を仮構せずにはいられない。しかもそうやって自分を演出してしまうことよりも、演出された自分にしか自覚的になれない人間の愚かしさ。突き詰めて言えば、自分が何を語っているのかもわからぬまま、虎になっていかなければならない（＝人間として死んでいかなければならない）『悲劇』を『山月記』は物語っているのである。<sup>(13)</sup>

蓼沼は、李徴は告白することによって自分の「(悲)劇性」を自覚することになり、目の前にいる哀愴から自分を差異化していくことにより「自己の存在証明を見出そうとしている」が、その「(悲)劇性」のみに目を奪われた結果、自分の言葉によって自分自身が挑発されてしまい、客観的な自己認識ができなくなってしまった点に「悲劇」を認める。李徴の自己認識が「自己劇化」によって歪められていったと主張する。

この蓼沼の主張に対して、山本欣司は、従来の『山月記』研究における「李徴排除の力学」（李

徴を批判することにより倫理的な尺度を持ち込んで『山月記』を読み解こうとする態度)を断ち切ることに繋がらないとして批判を行う。自らの自己認識をそれほどまでにゆがめなければならなかった自己否定(これを山本は「後悔の深さ」であると解釈する)をもっと積極的に汲み取るべきであると主張するのである。そして、あくまで虎になった理由は「わからぬ」にも拘わらず、(後悔の深さゆえに)あえて理由を見つけだそうとするからこそ「性情」に注目せざるを得なかったのだとし、『山月記』の悲劇を次のように指摘する。

李徴の悲劇とは、おのれの『性情』に振り回され、破滅したところに存するのではない。自分が『すつかり人間でなくなつて了ふ』時を目の前にした彼が、『性情』に振り回され、『過去』・才能を空費したと考え、深い後悔に苛まれていること。己を襲った不条理な事態をも『性情』によるものと述べ、自分を責めていることが悲しいのである。<sup>44)</sup>

これに対して「李徴の告白」を自己認識の「過程」であるとする立場を採った研究としては田中実のものが挙げられる。自己認識が客観的に行われていないと解釈する点は蓼沼・山本の主張と共通するが、田中は、作品後半部において李徴と同化する「語り」の構造を指摘しながら「李徴の告白＝自己認識の過程」であり、語るにつれて次第に自己認識における「自己像」が変容する点を指摘し、告白の最後まで「他者性」が欠如していた点を問題とし、「自閉」をキーワードにして次のように主張する。

自己否定あるいは自己批判をしている李徴はそうしている自分自身に対しては肯定せざるを得ないのであるから、自己否定及び自己批判ではなく(微妙な違いに聞こえるとは思いますが、そのレベルではなく)、自己を対象化し、それを《批評》していくことが要請されていた……。その際、李徴は妻子を犠牲にしている自分自身を自虐的に嘆くだけでなく、李徴自身の中に抱え込んでいた友人や妻子に対する李徴の内面、その〈自閉〉の形こそ《批評》の対象とされるべきではなかったのではなかろうか。<sup>45)</sup>

以上のように、「李徴の告白」を行為として分析する研究は、その告白行為を自己認識の「結果」と捉えるか、あるいは自己認識の「過程」であるかにより二分される。ただ、李徴が行った告白は、彼が虎になって以来ひたすら考え続けたことを、あらためて「考えながら語っている」ものと思われる。そのような意味において、李徴の告白は自己認識の「結果」でもあり「過程」でもあるといえる。むしろ問題とすべきは、その行為目的を達成するためにどのような言辭を用いたかである。この場合の行為目的とは、「袁愴に対して自分の身の上で起こった悲劇を理解してもらうため」となるが、まず、「李徴の告白」の中で語られる「悲劇」がどのような「語り方」で袁愴に向けて示されているのかについて、テキストを忠実に読み解くことによって検討し、そこから李徴の人間性を浮き彫りにすることである。

本稿における研究も、「李徴の告白」の行為的側面に焦点を当てるという研究アプローチを採るが、その場合、「告白」という行為の目的を達成するために李徴がどのような言辭を用いていたのかを問題とする。『山月記』は、特定の文法形式、語彙を意識的に使用しその効果を狙っているため、先行研究においていくつかの文体的特徴が指摘されている<sup>46)</sup>。ただし、それらの特徴を指摘

することが直接『山月記』の主題論に影響を与えることは少ない<sup>(17)</sup>。そこで、本稿では「李徴の告白」に用いられた言辞に注目し、しかも『山月記』の主題にまで踏み込んだ議論を行うために、告白における言辞に用いられている修辞技巧に着目する。ここでは、多くの『山月記』研究において問題とされ続けている「臆病な自尊心、尊大な羞恥心」の分析が中心となるが、これまで「一纏め」で扱われてきた<sup>(18)</sup>「臆病な自尊心、尊大な羞恥心」に対し、修辞的な視点から分析を加えることにより、袁愔に対してこのように語った李徴の人間性、ひいては『山月記』の新たな読みの可能性を示しうると考える。

## 2. 「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」の修辞

### 2.1. 告白の方略とのかかわり

「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」は李徴の告白の中に現れる。まず、李徴の告白全体を引用する<sup>(19)</sup>。

何故こんな運命になったか判らぬと、先刻は言ったが、しかし、考えように依れば、思い当ることが全然ないでもない。人間であった時、己は努めて人との交を避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといった。実は、それが殆ど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかった。勿論、曾ての郷党の鬼才といわれた自分に、自尊心が無かったとは云わない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいうべきものであった。己は詩によって名を成そうと思いつながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交って切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。かといって、又、己は俗物の間に伍することも潔しとしなかった。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。己の珠に非ざることを惧れるが故に、敢えて刻苦して磨こうともせず、又、己の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかった。己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによって益々己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になった。人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だという。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これが己を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変えて了ったのだ。今思えば、全く、己は、己の有っていた僅かばかりの才能を空費して了った訳だ。人生は何事をも為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなどと口先ばかりの警句を弄しながら、事實は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とが己の凡てだったのだ。己よりも遥かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となった者が幾らでもいるのだ。虎と成り果てた今、己は漸くそれに気が付いた。それを思うと、己は今も胸を灼かれるような悔を感じる。己には最早人間としての生活は出来ない。たとえ、今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作ったにしたところで、どういう手段で発表できよう。まして、己の頭は日毎に虎に近づいて行く。どうすればいいのだ。己の空費された過去は？ 己は堪らなくなる。そういう時、己は、向うの山の頂の巖に上り、空谷に向って吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えた

いのだ。己は昨夕も、彼処で月に向って吼えた。誰かにこの苦しみが分って貰えないかと。しかし、獣どもは己の声を聞いて、唯、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂って、哮っているとしか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己の気持ちを分かってくれる者はない。ちょうど、人間だった頃、己の傷つき易い内心を誰も理解してくれなかったように。己の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない。(下線引用者)

「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」はいくつかの問題を内包している。まず指摘しておきたいのは「虎」と「羞恥心」とのイメージのずれである。李徴は、自己の巨大な欠点として「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」を挙げ、これらと虎への変身との因果関係を強調している。確かに、「自尊心」は自信、尊大、傲慢といった性質と連続しており、「自尊心」と「虎」にはイメージの重なりが感じられる。しかし、その一方で「羞恥心」に「虎」と連続するイメージはない。「羞恥心」は、傲慢、冷酷、狂暴、孤高などといった虎のイメージとは、むしろ反対の性質と結びつく語だからである。つまり、李徴の告白の中で、自尊心から虎に変身したという部分は納得しやすいのに対して、羞恥心から虎に変身したという部分は、少なからず分かりにくいのである。それならば李徴はなぜ、自己を虎に変身させた巨大な欠点として、「臆病な自尊心」とともに「尊大な羞恥心」を挙げたのであろうか。この疑問は、李徴の告白内容を検討することでさらに鮮明になる。

李徴は告白の中で、自らの巨大な欠点として「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」を並列させている。それでは、彼の告白の中で自尊心と羞恥心の二つはどのように語られているのであろうか。李徴の自尊心は告白の中に明瞭に現れている。李徴の自尊心の強大さについては、香西に次のような指摘がある<sup>(29)</sup>。

李徴は自分の才能について、「今思えば、全く、己は、己の持っていた僅かばかりの才能を空費して了った訳だ。」などと一見謙虚を装いながら、その舌の根も乾かぬうちに、今「堂々たる詩家となった者」は、「己よりも遥かに乏しい才能」であったなどと、意味不明のことを口走るのである。「わずかばかりの才能」より「はるかに乏しい才能」とは一体どんな才能なのだろう。結局、李徴は認めたくないのだ、成功した人間が自分より才能が豊かであるということ。

さらに、その後の告白の中には「たとえ、今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作ったにしたところで、どういう手段で発表できよう。」という嘆きがある。李徴は告白をしている時点においても、自らの詩作の才能を否定してはいない。彼の告白は全体的に「一見謙虚を装」ってはいるものの、告白には自己の才能についての強い自負が現れており、そこから読み取れる彼の自尊心は少なくとも「臆病な自尊心」と呼べるような遠慮がちなものではない。それでは、彼の羞恥心についてはどうであろうか。告白の中で「羞恥心」という語は三回使われている。しかし、告白の中で語られる事実や自己の心理分析の中に、彼が鋭敏な羞恥心あるいは強い羞恥心の持ち主であったことをうかがわせる部分を見出すことはできない。ただし、あえて探せば、羞恥心ととれる部分がないでもない。特につぎの二箇所がそれに該当するであろう。「己の珠に非ざることを懼れ

るが故に、敢えて刻苦して磨こうともせず「才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧」の二つである。自分に才能のなかった場合を恐れ、さらにそれが露見した場合を恐れたというのである。特に、露見を恐れたという点に羞恥心を感じとれるかもしれない。しかし、ここに語られている心理は、自分の天才的な才能を信じながらも、そこに100パーセントの確信を持ってなかったということである。自分の才能に対し強い自信を持ちながらも、その自信は密かな不安を内包していたということであるから、これは「臆病な自尊心」そのものと言うべきであろう。この二箇所の自己分析は、一見、李徴の羞恥心を反映しているかのようにも感じさせるが、その説明には「臆病な自尊心」だけで十分であり「尊大な羞恥心」を持ち出す必要は全くないのである。

上の段落では特に二つの部分を抜き出し、これらを「羞恥心ととれる部分」として検討した。しかし、これらは内容的に羞恥心に近いという以上に、形式的にそれらを羞恥心と錯覚させる仕掛けが施されている。問題となる箇所をその前後を含めて引用してみる。

己は詩によって名を成そうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交わって切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた。かといつて、又、己は俗物の間に伍することも潔しとしなかつた。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。己の珠に非ざることを惧れるが故に、敢えて刻苦して磨こうともせず、又、己の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかつた。

「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」を挟んでその前後に具体的な行動が語られている。そして、その前後ではいずれも二つの行動が並列されており、形式上「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」と並行的である。この形式は、一方の行動が「臆病な自尊心」に、もう一方が「尊大な羞恥心」に対応しているかのような印象を与える。さらに、並列された行動はそれぞれ、そこに感じられる自尊心に濃淡がある。前の部分では「己は俗物の間に伍することも潔しとしなかつた」の方がより自尊心を感じさせ、後の部分では「己の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかつた」がより強い自尊心を感じさせる。その結果、前後とも、残りの一方が「尊大な羞恥心」に対応しているように錯覚させ、「尊大な羞恥心」に対応する実態が存在したかのように感じさせるのである。しかし、前段落で検討したとおり、「尊大な羞恥心」に対応しているかに見える行動は、いずれも「臆病な自尊心」から生まれた行動であった。そして、これと同様の仕掛けは、前段落において検討したもう一つの「事実は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とが己の凡てだったのだ。」についても指摘できる。李徴がこれほどまでに「尊大な羞恥心」にこだわったのはなぜか。この問いは、先ほど指摘した「虎」と「羞恥心」とのイメージのずれと軌を一つにする問題である。

この問題を考えるためにいくつかの作業を行ってみたい。まず「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」の中の「臆病」「自尊心」「尊大」「羞恥心」をばらばらに切り離してみる。すると、内容的に「臆病」と近い位置にあるのは「羞恥心」であり、「尊大」と意味的に近い位置にあるのは「自尊心」であることに気付く。たとえば、



自尊心の強さが、周囲に尊大という印象を与えた。

彼が臆病に見えるのは羞恥心が強いためだ。

といった表現は自然であろう。さらに、「自尊心」と「羞恥心」の意味的な位置関係を考えてみる。両者は相補関係、相対関係、反対関係といった完全に対をなす関係にあるわけではないので、対義語の範疇には入らない。しかし、「自尊心」は肯定的な自己評価を、「羞恥心」は否定的な自己評価を出発点としている点において対照的であり、ここから自己の言動におよぼす影響、周囲に与える印象といった多くの点で、両者は反対の方向に向かっていく。「自尊心」と「羞恥心」は、対義語ではないものの、意味的に対照的な位置にある。そして、「自尊心」と「羞恥心」の位置関係が対照的であることは、それぞれと近い関係にある「尊大」と「臆病」もまた、対照的な位置関係にあることを意味する。これらの点をまとめると、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」の意味上の特徴として次のような点を指摘することができる。

(1)「自尊心」と「羞恥心」は対照的な位置にある。

(2)「臆病」は対照的な位置にある「自尊心」を修飾し、「尊大」は対照的な位置にある「羞恥心」を修飾している<sup>(21)</sup>。

(3)対称的な位置にある「自尊心」と「羞恥心」が「と」で結ばれている。

それでは「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」の内包するこの複雑な意味関係は、どのような効果を作り出しているのだろうか。

ここで再び李徴の告白を検討してみよう。李徴の告白では自尊心をめぐる言葉の置き換えの行われている箇所がいくつかある。一つは

人間であった時、己は努めて人との交わりを避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといった。

実は、それが殆ど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかった。

である。ここでは、「倨傲」「尊大」がそれらと対照的な位置にある「羞恥心」に置き換えられている。しかし、「羞恥心に近いもの」が、「羞恥心」とは対照的な「倨傲」「尊大」と受け取られたのはなぜなのであろうか。この点に関して李徴の説明はない。そして、もう一つは

勿論、曾ての郷党の鬼才といわれた自分に、自尊心が無かったとは云わない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいうべきものであった。

である。ここでは「自尊心」が「臆病な自尊心」に置き換えられている。「自尊心」に「臆病な」という修飾語を冠したことは二つの効果を指摘できる。一つは「臆病な」という控えめな語が「自尊心」を小さく見せる効果であり<sup>(22)</sup>、もう一つは「自尊心」を「羞恥心」に近いものと感じさせる効果である。(1)(2)に示したように、「臆病」は意味的に「羞恥心」と近い位置にあるため、「臆病な」は被修飾語を「羞恥心」に近づけて見せる。ただし、(1)に示したとおり「自尊心」と「羞恥心」とは対照的な位置にあるため、「自尊心」を「羞恥心」に近づけることは「自尊心」を小さく感じさせることでもある。結果的に、「臆病な自尊心」は二つの方法によって「自尊心」を小さく感じさせているのである。「自尊心」をめぐるもう一つの置き換えは

己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによって益々己の内なる臆病な自尊心を

飼いふとらせる結果になった。人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だという。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。

に見られる。ここでは「飼いふとらせ」た「臆病な自尊心」が一文を隔てた後で「尊大な羞恥心」に置き換えられている。「自尊心」が「臆病な自尊心」となることで「羞恥心」に近づき、「羞恥心」が「尊大な羞恥心」となることで「自尊心」に近づいて、互いの距離が短くなった結果、このような置き換えが可能となっているのである。さらに、この置き換えが一文を隔てて行われていることは、置き換えの違和感を軽減することに貢献している。仮に、この置き換えが意識的に行われたものであると仮定すれば、これは巧みに計算された置き換えであると言える。

上に示した自尊心をめぐる置き換えは全て、一つの方向を指向している。それは自らの自尊心を小さく見せるという方向である。念のため付け加えると、自尊心あるいは羞恥心をめぐる、告白の中にこれと逆方向での置き換えは存在しない。ここから浮かび上がって来るのは、自己の自尊心の隠蔽という、李徴のたくらみである。もちろん、李徴は自尊心を完全に隠そうとはしていない。むしろ、自己の巨大な欠点としての自尊心の存在を認めている。自己の自尊心を認めた上で、それを徐々に小さなものに見せていく、これが自尊心を隠蔽するためにとられた方略である。そして李徴はこの方略を、自尊心を対照的な羞恥心にすり替えるという形で実行しようとした。ただし、羞恥心と自尊心では隔たりが大きいため、そのままのすり替えは難しい。その距離を縮めるために作り出された道具が「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という修辞なのである。実際、この修辞は、虎に変身した原因として自尊心とともに羞恥心を挙げる事が可能なほどに両者の距離を縮めている。この修辞が彼のたくらみを可能にしたという点で、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」は彼の説得の要に位置していると言える。先程、内容的には必要ないにもかかわらず、告白の中で「尊大な羞恥心」が繰り返されていると述べた。この指摘は、李徴は説得の目的を達成するために「尊大な羞恥心」を繰り返したと改めねばなるまい。「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」を並列させた後、李徴は虎に変身した原因を、「臆病な自尊心」から「尊大な羞恥心」へと移行させていく。自分が虎に変身した原因について李徴は最後に次のように語る。

人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だという。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これが己を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変えて了ったのだ。

自分を虎に変身させたものは羞恥心であったと、李徴は最後に声高に語るのである。

## 2.2. 方略の意味と『山月記』の悲劇性

香西は告白の一般的性質を次のように述べて、李徴の告白をそのまま信じることの危険性を強調している<sup>(23)</sup>。

人が、告白という形式で他人に知らせようとする「真実の」自分とは一体何なのだろうか。おそらくそれは、現実の、「あるがまま、あったがまま」の自分ではないはずだ。なぜなら、「あるがまま、あったがまま」の自分であれば、それは他人によってすっかりお見とおしであり、わざわざ告白する必要もないからだ。だから、告白という形式によってしか語られない

「真の」自分とは、他人の目には見えない「本当の」自分、あるいは、現実には存在しないが、本来ならばそうで「あるべき、あるべきだった」自分であろう。

この指摘はわれわれの分析を先取りしたものと言って過言であるまい。李徴の告白うち、自己の過去を分析した前半は、そのほぼ全体が自己の自尊心を隠蔽するための装置なのである。そして、そのための方略として、自己の自尊心を最初に認め、その後、徐々に小さく見せていくという手順のとらえていることを確認した。しかし、自尊心の隠蔽を最終的な目的とした場合、この方略は不十分な選択肢であると感じられるかもしれない。この方略では、自尊心を相対的に小さくすることはできても、完全に隠蔽することはできないからである。が、ここでわれわれは、袁俊が過去の李徴をよく知る人物であることを思い起こさねばならない。袁俊は、人々から「倨傲だ、尊大だ」と言われていた李徴の過去を良く知る人物なのである。そのような袁俊に対し巨大な自尊心の存在を認めて見せることは、自分自身をあからさまに語る印象を与え、告白の信憑性を増す。レトリックにおけるエトスの効果である。さらに、嘘は真実の中に紛らわすことでより巧妙なものとなる。ヴァインリヒは『うその言語学』の中で次のように述べる<sup>(24)</sup>。

白と黒とが常に極めて明白に区別されているのなら、嘘の問題は大いなる問題ではないであろう。半ば嘘というのがある。そして、それが甚だ見わけにくいという事からかえって非常に危険な、あの真実のわずかなゆがみがある。

そして何より、この屈折した方略を、過剰なほどの技巧を駆使して実行していることが、そのまま李徴の性格描写となっている点を重視すべきである。彼の知性、屈折、巧妙さなどの性格がここには端的に表現されている。さらに、方略実行のために過剰なほどの技巧が駆使されていることは、彼にとって、この方略が絶対に成功させなくてはならないものであったことを伝えている。

李徴は、この告白が人間として自分自身を語れる最後の機会であろうことを十分に自覚していたはずである。人間としての最後の告白においても、いや、最後の告白だからこそ、自分の本当の姿を隠蔽しなければならなかった点に、われわれは李徴の救われるすべのない悲劇を見出す。そして、その隠蔽が巧妙かつ綿密である分、その悲劇は深い。彼に自らの自尊心を隠蔽させているのは、他でもない彼の自尊心である。彼は告白の中で、自己の自尊心が自身の大きな欠点であったと繰り返しているが、その繰り返しは、自尊心を隠蔽する手続きの一部として行われているに過ぎない。彼の強大な自尊心は、彼を支配し彼を苦しませ続けてきたはずである。しかし、人間としての最後の瞬間においても、彼はその強大な自尊心から少しも開放されてはいないのである。

### 3. 「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」における「語り尽くせない何か」の正体

前節では説得の戦略という観点から「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」を分析してきた。しかし、このような分析を行っても、なお、「語り尽くせない何か」をこの言葉は感じさせるのではないだろうか。この言葉が『山月記』の中でひととき印象的であるのも、「語り尽くせない何か」を感じさせるからに他ならない。蓼沼はこの点について次のように語っている<sup>(25)</sup>。

確かに『臆病な自尊心』と『尊大な羞恥心』という言述は、〈臆病な羞恥心〉〈尊大な自尊心〉という以上の何かを聞き手に期待させる。それだけに私たちは、それを『山月記』の重要語句として『自意識』に苦悩する〈近代人〉を、言い換えれば〈近代文学〉として書かれた〈中島敦〉の『山月記』を読んで来たのである。しかし、『臆病な自尊心』といい、『尊大な羞恥心』といい、李徴の自己分析を読む限りその内実も、またそう表現しなければならない必然性も全く伝わっては来ないのである。

「内実」をともなっていないにもかかわらず、「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」がこれほどに読者を惹きつけるのはなぜか。本節では、この「語り尽くせない何か」の原因を明らかにし、その後、この言葉のもう一つの修辞技法を指摘してみたい。

修辞技法の一つに対義の語をつないで使用する撞着語法(oxymoron)と呼ばれる技法がある。『臆病な自尊心と、尊大な羞恥心』も撞着語法の一つである<sup>(26)</sup>。撞着語法の中で慣用語となっているものには、たとえば「慇懃無礼」「公然の秘密」「無知の知」などがある。このように慣用語となってしまうと、別段深みは感じられなくなってしまうが、「冷酷なやさしさ」「空しい充実感」「冷たい炎」「醜悪な美貌」といった慣用語化していない表現は、ある種の深み、時には格調の高さを感じさせる。ただし、われわれがこれらの表現に接した時、それに対応する実体を実感した上で、深みや格調の高さを感じているのではないことに注意する必要がある。撞着語法による表現が「分かった」と感じた瞬間に、われわれはその表現に魅了されている。比喩は、たとえられる趣意(tenor)が先に存在しなくては成立しないが、撞着語法では、趣意にあたる指示対象の存在を必ずしも必要とはしない。つまり、実体のないところでもその表現が「分かった」とさえ感じさせれば撞着語法は成立する。それが感じさせる魅力は、対義語の語の組み合わせという形式の生み出すものであると同時に、少なからず錯覚的なものなのである。しかも、その魅力が、ある種の深みや格調の高さという「高級な」ものであることを、撞着語法は特徴とする。なお、撞着語法がセンテンスの形式をとって現れた場合、一般には撞着語法ではなく逆説(paradox)に分類されるが、その場合にも同様の効果が指摘できる<sup>(27)</sup>。小林秀雄とシェイクスピアの例を引用してみる。

「誰も、モーツァルトの音楽の均整を言うが、正直に彼の音を追うものは、彼の均整が、どんなに多くの均整を破って得られたものかに容易に気づく筈だ。」(小林秀雄『モーツァルト』)<sup>(28)</sup>

「マクベス殿よりは小さくて、ずっと大きなお人だ。」(『マクベス』第一幕第一場)<sup>(29)</sup>

「それほどの運もないが、ずっと幸運なお人だぞ。」(『マクベス』第一幕第一場)

これらの文はいずれも、思わせぶりな、ある種の魅力をたたえている。シェイクスピアは、撞着語法あるいは逆説を好んで使った作家として知られている。中でも、上にも引用した『マクベス』第一幕のいくつかの例は特に有名であるが、ここでは、撞着語法・逆説の作り出す魅力を最大限に利用した例として、『リア王』第一幕第一場のフランス王のせりふを引いてみたい。これは、『リア王』冒頭の有名な「愛情くらべ」において、リアに対し「申し上げることは何もない。」(Nothing.)と言ったがためにリアの怒りを買って、無一文で追放されることとなった末娘のコーデ

イリアに対し、フランス王が求婚するせりふである。

コーディリア、あなたは富を失ってこよなく豊かに、棄てられてこよなく貴く、蔑ろにされてこよなくいとおしきものになったのだ。あなたとその優れたお心とをこの場で私が頂戴する。誰にも文句は言わせぬ、棄てられたものを拾うだけです。神々も見捨て給うのか！だが、不思議な事に、神々の冷酷無比な蔑みに、私の愛は却って火と燃え、その人にあくがれる。無一文の姫君は、ブリテン王、たまたま私の手に落ち、私の妃に、吾が同胞の、吾がフランスの妃になったのです。今となつては、水郷バーガンディーの公爵が何人訪れようと、この値もつかぬ高貴な乙女を私の手から買い取る事は出来ないのだ。

Fairest Cordelia, that art most rich, being poor;  
Most choice, forsaken; and most lov'd, despis'd!  
Thee and thy virtues here I seize upon,  
Be it lawful I take up what's cast away.  
Gods, gods! 'tis strange that from their cold'st neglect  
My love should kindle to inflam'd respect.  
Thy dow'rless daughter, King, thrown to my chance,  
Is queen of us, of ours, and our fair France.  
Not all the dukes of wat'rish Burgundy  
Can buy this unpriz'd precious maid of me.<sup>(30)</sup>

コーディリアに対する彼の純粹で一途な気持ちが、格調高く語られている。しかし、このせりふは、愛情表現あるいは求婚のせりふとしてはいささか例外的である。当のコーディリアに対する賛辞、あるいはコーディリアの魅力が全く語られていないからである。その内実がきわめて希薄でありながらも、格調と魅力を備えた特異なせりふであると言える。『リア王』第一幕第一場において、主要登場人物の中でコーディリアだけが、過去の具体的言動を全く語られていない。これは劇の進行上の必要性による作者の意図的な配慮と考えられるが、ここではこの問題には言及しない。いずれにせよ、引用したフランス王のせりふも、この条件を守って作られている。その結果、このせりふにおいてフランス王は、彼女の具体的魅力に触れることなしに、彼女への純粹かつ熱い気持ちを語らねばならず、しかも、それは彼のエトスを表現する格調高いものでなくてはならない。この難しい条件を満たすためにシェークスピアの選んだ方法が、対照的な意味関係にある語の組み合わせを駆使することであった。原文で下線を引いた部分に対照的な意味関係にある語が見られる。このせりふが、対照的な語の組み合わせを核として作られていることがお分かりいただけよう。実質的な内容が希薄であるにもかかわらず、対照的な語の組み合わせを駆使することによって、ここまで格調高く、深みのあるせりふが作り出せるのである。

これが「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」における「語り尽くせない何か」の正体である。読者を惹きつけてやまない「語り尽くせない何か」は多分に錯覚的なものなのである。前節で述べたように、李徴は自尊心の塊のような男である。虎と成り果てた自らの運命、あるいはその原因は、深遠・難解でなくてはならず、しかも格調高く語られなければ彼の自尊心の許すはずがない。「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」における撞着語法は、説得の戦略ばかりでなく、彼が自らの告白において望んだ「演出」とも合致する技法なのである。

最後に、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」におけるもう一つの修辞技巧として、擬人法の使われていることを指摘しておきたい<sup>(31)</sup>。「尊大な」という形容動詞は人間の性格面を評する語であるが、ここでは、それが人ではない「羞恥心」に対して使われている。擬人法については、たとえば「感情をかきたてることを意図したパッセージのために、とっておくべき文彩の一つである。」<sup>(32)</sup>といったように、感情を喚起する印象的な表現を作る技法として一般に説明されるが、「尊大な羞恥心」においては文脈に即した、より限定的な効果を重視すべきである。この効果については瀬戸賢一の次のような指摘がある<sup>(33)</sup>。

たとえば、『インフレで儲けが食いつぶされる。』(inflation eating up profits) では、擬人法により感情を煽り、表現に動きを与えるだけでなく、『インフレ』という抽象概念に、独立して行動する意志的存在物の地位を与える。『インフレ』は一人歩きを始める。

李徴において、本来彼の性格の一部分であるはずの羞恥心が、やがて李徴自身にもコントロールできない怪物と化し、李徴自身を滅ぼしていく。李徴は言う。「人間は誰でも猛獣使いであり、その猛獣に当たるのが、各人の性情だという。己れの場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。」「尊大な羞恥心」という擬人法は羞恥心を人格化して見せる。その結果、李徴自身の手を離れて勝手に動き回るもの(self-controllability)という印象を与え、自尊心によって自らが滅ぼされたという李徴の説明をより効果的なものとしている。「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」は修辭的に、実に巧みに計算された言葉なのである。

## 注

- (1) 木村一信『『山月記』論一滅びへの恐れ一』(『中島敦論』, 双文社, 1986所収), 鷲只雄「中島敦一そのエスキス一」(『中島敦論一「狼疾」の方法一』, 有精堂, 1990所収), 丹藤博文『『山月記』あるいは自己解体の行方』(田中実・須貝千里編『〈新しい作品論〉〈新しい教材論〉へ3一文学教育と国語教育研究の交差一』, 右文書院, 1999所収)
- (2) 渥美孝子「中島敦『山月記』一外形と内心・語りの構図一」(田中実・須貝千里編 前掲書所収), p. 131
- (3) 佐々木充「山月記一存在の深淵一」(『中島敦の文学』, 桜楓社, 1973所収) p. 112
- (4) 佐々木充 前掲書 p. 112
- (5) 佐々木充 前掲書 p. 113
- (6) 佐々木充 前掲書 p. 114

- (7) 鷺只雄『『山月記』再説』（『中島敦論—「狼疾」の方法—』、有精堂、1990所収）など
- (8) 「李徴が虎になった原因」を問うことと同様に『山月記』研究における常套手段として用いられるのが「李徴のどこか欠けるとは何か」という問い立てであるが、「告白内容から明らかにすることが不可能である」（関良一「『ギリシャ的叙情詩』と『山月記』について」、『言語と文芸』42、1965.9）と見なされている問題なので、本節の研究史概観の対象から除外することとする。
- (9) 前田角蔵「自我幻想の裁き—『山月記』論—」、『国語と国文学』70(10)、1993.10、p.42のまとめによる。
- (10) これらの主題を網羅的に反映する形で、今日の高等学校の指導書における『山月記』の主題も「臆病な自尊心と尊大な羞恥心という猛獣を心中に飼い太らせた結果、虎に身を墮とした詩人李徴の悲劇」とし、「自我意識に鋭敏であり、理想の自己像と現実の自己との間隙に悩む青少年期に自己を照射させる教材」（村上呂里「山月記（中島敦）」、浜本純一・松崎正治編『作品別 文学教育実践史事典・第二集』、明治図書、1987、p.191）といった位置づけで『山月記』は読み続けられている。
- (11) 山本欣司「後悔の深淵—『山月記』試論—」、『日本文学』47(12)、1998.12、p.21
- (12) 蓼沼正美「『山月記』論—自己劇化としての語り—」、『国語国文研究』、1992.12、p.51
- (13) 蓼沼正美 前掲論文 p.56
- (14) 山本欣司 前掲論文 p.27
- (15) 田中実「〈自閉〉の咆哮—『山月記』—」、『日本文学』43(5)、1994.5、p.53
- (16) たとえば、増淵恒吉「文学作品における形象の問題—『山月記』の取扱い方について—」、『日本文学』、1956.11、田所寛行「『文法で読みを深める』ということ—『山月記』による一つの例—」、『月刊国語教育』、1986.2、長尾高明、「鑑賞指導のための教材研究法」、明治図書、1990などが挙げられる。
- (17) ただし、その中でも、告白における否定表現の多用という文法的特徴に注目し、そのように語る李徴の人間性に考察を加えた論考として注目すべきは、香西秀信「自己欺瞞の文法的特徴：中島敦『山月記』」（『修辞的思考』、明治図書、1998所収）である。
- (18) 「臆病な自尊心、尊大な羞恥心」について、例えば、「自意識過剰と自信欠如」を同時にあらわした表現であるといった捉え方（松坂俊夫「中島敦『山月記』」、増淵恒吉監修『国語教材研究講座 高等学校現代国語 第一巻 小説』、有精堂、1967、p.174）や「『臆病な自尊心』も『尊大な羞恥心』も実は一つのものの別の面でしかなかった。」（稲垣安伸「『山月記』の主題は何か」、『月刊国語教育』、1982.9、p.101）といった捉え方などが為されているように、おおむね、この表現は、同一心理状態に対する視点の違いとして説明がなされている。
- (19) テキストは新潮文庫『李陵・山月記』によった。
- (20) 香西 前掲書 p.149
- (21) 松村明敏「中島敦の『山月記』」（『国文学解釈と教材の研究』、1958.8、p.119）に、生徒の

発言を引用する形で、「臆病な」と「自尊心」、「尊大な」と「羞恥心」が対照的な位置にあることの指摘がある。また、鷲只雄も、これが撞着語法であるという形でこの点を指摘している。(鷲只雄『『山月記』私見』、『中島敦論—「狼疾」の方法—』、有精堂、1990、p.291)

- (22) これと対照的に、「尊大な」は「羞恥心」を大きく見せる効果がある。
- (23) 香西 前掲論文 pp.135-136
- (24) ハラルト・ヴァインリヒ、井口省吾訳注『うその言語学』、大修館書店、1973、p.99
- (25) 蓼沼 前掲論文
- (26) 完全な対義語でなくても、意味的に対照的な語の組み合わせであれば撞着語法に分類されるため、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」も撞着語法の一つと認定できる。
- (27) たとえば、ランハムのレトリック用語辞典では撞着語法を「濃縮された逆説。」(Richard A. Lanham, *A Handlist of Rhetorical Terms* (1968, Berkeley), p. 70)と定義しているように、伝統的なレトリックでは、撞着語法と逆説を、文か句かという長さの違いとして説明している。ただし、両者の間には質的な差も認められる。この問題については、香西前掲書 pp.86-93を参照。
- (28) 小林秀雄の例は中村明『日本語レトリックの体系』(1991、岩波書店、p.379)の矛盾語法の項目より借用した。ただし、撞着語法やあるいは逆説の魅力が多分に錯覚的であるという指摘は、中村をはじめ、撞着語法について言及した諸文献の中に見出すことができなかった。
- (29) シェイクスピアの翻訳は福田恒存訳を使用した。いずれも新潮文庫本による。
- (30) 英文テキストは、*The Riverside SHAKESPEARE* (1974, Boston) による。
- (31) 「尊大な羞恥心」が擬人法であるという指摘は、われわれが調査した先行研究の中には見出せなかった。
- (32) Edward P. J. Corbett & Robert J. Connors, *Classical Rhetoric for the Modern Student* (1999, Oxford) p. 402
- (33) 瀬戸賢一『認識のレトリック』(1997、海鳴社) p.91